

大島正健著

漢字音韻考

自家藏版

序

漢字には其一部は義を示し、他は其音を表はす、音義兼用の者多し。之を名づけて諧聲字又は形聲字と稱す。この諧聲字は漢字の大多數を占む。説文諧聲字に注して某に従ひ某の聲と爲す即ち波を水に従ふ皮の聲、松を木に従ふ公の聲と爲すが如し。然るに時代の推移と共に、字音に變化を生じ、今音を以て古音を解釋し難き者多く、随つて某の聲といふ、其眞音を會得し難き者多きに至れり。本書は説文の聲と稱するは、如何なる意義のものなるか、之を説明する目的を以て、卑見を世に公にしたるなり。又之を中心として、發音の相通ふ所の頭音の轉換を説き、更に字音變遷の例を示せり。この舊刊の小著既に絶版と爲り、其紙型も亦大震災

の際焼失せり。拙著は永存の價值あるべきものに非ざるべけれど、愚見の世に傳はらざるも、聊か遺憾と思はれ爰に原本に由りて、更に之を複製することゝ爲し、原文は羅馬字の記法を改めたるのみにして、殆ど在の儘にて再版せり。末尾に於いて追加二項を添ふ。前版の本書の表題は漢字聲符考と稱せしも、今回之を改めて漢字音韻考と名づく。

昭和五年 六月

大 島 正 健 識

漢字音韻考

大島正健著

言語の變遷には、世界を通じて一貫せる大則あり而して其特殊の系統には、又特殊の細則變則あるが故、古代に溯りて音聲の變化を探らんとせば、宜しく先づ其迹に存する所の自然の法則を原ね、之を案内者として、研究の道を進め行くべし。是れ最も安全なる方法なり。然らざれば妄斷臆說百出し、自ら塵埃を蹴立て、前途の明を遮り、不知不識の間に方向を誤るに至るべし。

數千年の時代を經過し來れる支那音の研究は、至難の上の至難の業に

して、勞苦と忍耐とを要すること尠からず、漢字は單音語に當てたる標記なれば、之を取扱ふこと綴字に比すれば不便甚だ多し。便宜のため、一字の音を分ちて、頭音體音尾音と爲すべし。頭音はいはゆる父音にして、之を只音と呼び、體音は母音、尾音は又父音なれど、體音若しくは體音尾音を合したる者を名づけて韻と唱ふ。韻の變遷は、時代時代の歌頌詩賦の類に由りて其迹を原ね得べしと雖も、音に至りては、僅かに經史其外の古書に散見せる、文字の用法に由りて、古音を察し得るのみにして、然かも其用法明確ならざる者甚だ多く、往々漠として捉へ難きことあり。幸に爾雅、說文、釋名の如き良書の殘存するありて、暗夜に光明を得るが如き觀あるを覺ゆ。

古音を判斷することの容易ならざるは、說文を引ける左の數例を見て悟り得べし。

注意 前版に比して、羅馬字の記法を改むること左の如し。

韻鏡新解に従ひ、合口音には頭音はw他はuを當つることとせり。
脣牙喉の音と母音と結びて拗聲と爲るときは、拗聲の符號をa e
i o u の如く母音の下に附す、即ち ya, ye, y, yu, yo. に當るなり舌
齒の音は拗聲の符號を直ちに其下に附して、母音の方に移さず、舌
音をち、ち、ち、齒音をち、ち、ち、と記す、これ ty, t'y, dy, ny, tsy, ts'y
dzy, sy, zy に當るなり。

龍 音は肉に従ふ童の省聲、廣韻力鍾切 *long*.

龍 へに従ふ龍の聲、廣韻丑龐切 *t'ong*.

龐 广に従ふ龍の聲、廣韻薄江切 *bang*.

驛 井に従ふ龍の聲、廣韻紀庸切 *k'ong*.

此用法に由れば、l は d にも、t にも、b にも、k にも通ひたる者と見做す

べきか。

樂 木に従ふ、廣韻五嶽切 ngāk

磔 石に従ふ樂の聲、廣韻郎擊切 lek.

鑠 金に従ふ樂の聲、廣韻書若切 sāk.

藥 艸に従ふ樂の聲、廣韻以灼切 yak.

瀌 水に従ふ樂の聲、廣韻匹各切 p'ak.

l は又 ng にも s にも y にも p にも通ひたるものか。

絲 絲言に従ふ、玉篇力管切 luan.

變 支に従ふ、絲の聲、廣韻秘戀切 puēn.

曄 孖に従ふ、絲の聲、廣韻生患切 suan.

l は p にも s にも通ひたる前例を確かめたるものか。

此法を以て推すときは、一音にして殆んど他の諸音全部に通ふ者あり

と言ふことを得べし。

夬 象形、廣韻古賣切 *kuai*.

袂 衣に従ふ夬の聲、廣韻弭弊切 *mei*.

通音 *k m*、

亨 象形、廣韻許庚切 *hæng*.

烹 同字の變形、廣韻普孟切 *pæng*.

通音 *h, p*、

毛 象形、廣韻莫袍切 *mau*.

耗 未に従ふ毛の聲、廣韻呼到切 *hau*.

通音 *m h*、

耳 象形、廣韻而止切 *ni*.

弭 弓に従ふ耳の聲、廣韻綿婢切 *mi*.

通音 j m、

少 小に従ふノの聲、廣韻書沼切 *seu.*
秒 禾に従ふ少の聲、廣韻亡沼切 *meu.*

通音 s m、

勻 象形、廣韻之灼切 *tsok*

豹 豸に従ふ勻の聲、廣韻北教切 *pau.*

通音 ts p、

匕 反人に従ふ、廣韻卑履切 *pi.*

尼 尸に従ふ、匕の聲、廣韻女夷切 *ni.*

旨 甘に従ふ匕の聲、廣韻職雉切 *si.*

通音 p n ts、

閤 門に従ふ合の聲、廣韻古沓切 *kap.*

苔 艸に従ふ合の聲、廣韻都合切 *tap*.

通音 *k t*、

𡵓 山𡵓に従ふ𡵓亦聲、*ngan*.

炭 火に従ふ𡵓の聲、廣韻他案切 *tan*.

通音 *ng t*、

今 今乙に従ふ、廣韻居吟切 *kin*.

念 心に従ふ今の聲、廣韻奴店切 *nem*.

通音 *k n*、

公 八ムに従ふ、廣韻古紅切 *kong*.

松 木に従ふ公の聲、廣韻祥容切 *zong*.

通音 *k z*、

甚 甘匹に従ふ、廣韻時鳩切 *zim*.

堪 土に從ふ、甚の聲、廣韻口含切 k am.

通音 z、k、

谷 象形會意、廣韻古祿切 k ok.

欲 欠に從ふ、谷の聲、廣韻余燭切 y ok.

通音 k y、

旬 勺日に從ふ、廣韻詳遵切 z un.

絢 糸に從ふ、旬の聲、廣韻許縣切 h uen.

通音 z h、

曉 日に從ふ、堯の聲、廣韻馨晶切 h eu.

燒 火に從ふ、堯の聲、廣韻式招切 s eu.

通音 h、s、

以上に列舉したるが如き通音法の承認し得らるべしとせば、支那音は

他と類を異にせる一種不思議なる音にして、口腔内の發音の位置の如何なる場所にあるを問はず、唇牙喉舌齒の音の其縁の近きも遠きも共に相轉換するを見れば其通轉の力の廣大なるに驚かざるを得ず、何れの音も相關係し、恰も a b c d e を配列して、ab, ac, ad, ae, bc, bd, be, cd, ce, 等と爲すが如き觀あり、されど是は誤解に基く所なるべし、説文諧聲字に注して某の聲と爲すは、多數の場合に於いては、音を示せるに非ずして韻を示せるに似たり、之を辨へずして、其聲を全部の音と解するときは、古音は奇怪なる音と爲りて、今音と聯絡なき大混亂を生ずるに至るべし、例せば袂の古音は夬、豹の古音は勾松の古音は公なりなどと言ふに至りては、全く其見解を誤れるものと謂ふべし。

元來漢字は單音語に當てたる標記なれば、漢字を以て表はされたる支那人の音韻に關する解説は明確ならざること多し。隋唐の人の韻の分

類を立て、之に名稱を附したるを見るに、綴字法を解する者の目より見れば、窮屈の法と評せざるを得ず。例へば *ong* (オウ) の韻を東即ち *tong* (トウ) の韻、*u* (エヌ) の韻を先即ち *sen* (セヌ) の韻、*a* (ア) の韻を歌即ち *ka* (カ) の韻と唱ふるが如し。是音と韻とを分別すること能はざるに由り、*ong*, *en*, *a* にて事足るべかりしを殊に音韻合聲の *tong*, *sen*, *ka* を以て代表せしめたるなり。綴字法にて音韻を合することの容易なるが如きは、支那人の夢想し能はざりし所なるべし。古より二字を合して一字に作る法あり而已を合して耳如是を合して爾と爲すが如し。南雅に扶搖を颯、不律を筆と記するも亦此法なり。これ後世の反切法に同じ。反切法とは人の知るが如く、上下に二字を置き、上の字より音を取り、下の字より韻を取りて、其音韻を合して、歸字を求むる法なり。是も亦甚だ迂遠なる法なり。例へば博毛切襖は、上の博の *pak* より *p*, 下の毛の *mau* より *au* を取りて、歸字襖の聲

を Pau と爲すなり。然るに漢字のみにては、此の如く羅馬字にて示すが如く容易ならず。博毛の二字相摩し、博の音毛の音を侵し、己が韻を捨てゝ其韻に移り、其結果として褒の新聲を得るなり。綴字にては、音は父音韻は母音、若しくは之に父音を附したる者にて、事足るべきを、之に對して音韻合聲の字を用ゐるは、如何に漢字の音韻を分別することの困難なるか、之を知るに足るべし。

同韻の語にて音義の異なる者に對し、轉音或は假借として、同字を當てゝ之を表はすは常に見る所なり

樂 音樂の義なれば五角切、娛樂の義なれば力各切なり。兩者今韻は異なるれど古韻は同じ。

稟 賜の義なれば力錦切、受の義なれば筆錦切なり。

畜 牧畜貯畜の義なれば丑六切、養の義なれば許六切なり。

射 騎射の義なれば神夜切、僕射の義なれば羊謝切なり。

率 統率の義なれば所律切、計數の義なれば呂卹切なり。

女 男女の義なれば尼呂切、汝の義なれば忍與切なり。

ム 私の義なれば息夷切、某の義なれば亡后切なり。

龐 高大の義なれば莫江切、充實の義なれば盧東切なり。

湯 熱水なれば土郎切、波動なれば尸羊切、腸谷の腸と通ずるときは

余章切なり。

谷 溪谷のときは古錄切、姓の名吐谷渾のときは余蜀切、匈奴王谷蠡

のときは盧谷切なり。

右の如き例は他に其數多し。反切法は此一字の用法を、音字と韻字との二字との上下二字に分ちたる者にして、求むる所の音と同音の字を以て音字と爲し、本字を以て韻字に當て、轉音或は假借の字は即ち歸字と

爲るなり。

兩語其聲其義共に相近く、其音の異なる者に對し、同韻の字を以て注を施せることあり。これいはゆる疊韻法なり。多數の中より引きて、左に數例を擧ぐべし。

易上彖傳に曰く貞は正なり。

禮王制に曰く例は成なり。

爾雅釋詁に曰く朝は早なり。

荀子修身篇に曰く少にして理むるを治と曰ふ。

三略に曰く禮は人の體する所なり。

毛詩注に曰く流は求なり。

說文に曰く葦は度なり。

釋名釋天に曰く天は顯なり冬は終なり。

同釋宮室に曰く倉は藏なり、庫は舍なり（古韻庫舍同律）

小爾雅廣言に曰く締は閉なり、登は升なり。

右の類と同様の者にして、其聲のみ通ひて、其義の通はざる者は、單に韻注と稱すべし、即ち韻の假借なり。

說文に某の聲とあるは、聲の全部を示せる者のみに非ずして、韻注なる者多きが如し、而して其韻注には、義の通へる者と、通はざる者との二種あり。聲の全部を示せる者を音符と稱するに對して、韻注を示せる者を韻符と稱すべし。古音を解釋せんとせば、この音符韻符の別に留意すること最も緊要なり。音符韻符を總稱して聲符と名づく。音符の音と唱ふるは、頭音の音の義に非ずと知るべし。

音符韻符の別を定めんとせば、頭音の系統を探るべき必要起る。本字と聲符と、其音の系統を異にする者は、聲符は只韻符なるべく、兩者の間に

系統を保つときは、古今兩音を比し、本字は古音にして、聲符は轉音なるか或は本字は轉音にして、聲符は古音なるか之を決するは重要な問題なり。之に加へて轉音には直接の關係無きも、語呂の上より特に同系統の音を有する字を以て韻符と爲せる者も多きに似たれば、問題は更に錯雜と爲り來る。

音の系統を探らんとせば、發音自然の法則を參照すること最も便なれば是より如何なる條件の下に轉音は行はれ來りし者なるか、試に其法則を原ぬべし。上古の音を探るは、至難の業なれば姑く我等が知る所の範圍にて韻書に見ゆる所の、唐宋時代の音を以て、其研究の材料と爲ん。我漢音吳音の假名は精確ならざるに由り、主として韻鏡の音を以て標準と爲すべし。韻の方は本題に緣故無きが故、四聲の別は記せず。

牙音

喉音

哥歌柯哥筭 (k'a)
可軻 (k'a)

阿痾 (a)
呵訶 (h'a)
何河荷苛 (a)

閣蛤鵠 (kap) 恰 (kap)
恰恰 (k'ap)
哈 (ngap)

始 (ap)
欵 (hap)
合 (ap) 洽 (ap)

甲鉀胛 (kap)

鴨押 (ap)
呬 (hap)
狎匣 (ap)

佳街 (kai) 圭桂 (kuei)
厓涯 (ngai)

娃 (ai) 蛙 (wai) 娃 (wei) 恚 (wi)

果 (kua)

嫫 (wa)

課 (k'ua)

葛 (k'at) 揭 (k'et)

揭 (k'ei) 渴 (k'at) 竭 (k'et)

渴 (gei) 揭 (get)

官 (kuan)

微 (keu) 激 (kek)

簌 (k'eu) 燉 (k'ek)

甄 (ken)

絹 (kuen)

景 (keng)

公 (kong)

區 (ku)

龔 (au) 罔 (ei) 遏 (at) 謁 (et)

喝 (hat) 歇 (het)

曷 (at)

綰 (wan)

邀 (eu)

覷 (ak) 檄 (ek)

煙 (en)

娟 (wen)

影 (eng)

翁 (ong)

謳 (ou)

奇崎剖奇(ㄱ)

綺崎崎(ㄴ)

猗椅倚(ㄷ)

奇騎錡(ㄹ)

義儀議(ㅁ)

義犧犧(ㅂ)

右の諸例を一見せば、牙喉兩音の關係につき、何人と雖も異論を挾む者無かるべし。k g の類を總稱して牙音と唱ふれど、其は適切なる名目には非ざるが如し。自由に喉音と往來するを見れば是も亦喉音の類なるべし。發聲に伴ひ、舌根を上げて暫く息を遮りて之を放てば、k g 若しくはhの音と爲れど其勞を取らざれば、聲の儘にて母韻の類と爲るなり。然れどもk g の音は必ずしも舌根より生ずる者のみに非ず、口腔の中部にても舌身を上げて此音を發し得べし。牙にて嚙むが如き形にて、此音を生ずることありて、牙音の名稱は附せられたるものならんか。喉音

所屬の者の中にて、y の字母を有する音の他と相通ふことの少きは、
注意し置くべし。他の喉音は合口音なるとき、此 y に通ふ例あり。

榮 (weng)

榮 (hueng)

螢 (weng)

榮 (yueng) 螢 (yueng)

枉 (wäng-wang)

王 (yuäng-wang)

緩 (wän-wan)

瑗 (yuän)

桓 (wän-wan)

垣 (yuän)

右の類の古音は、夫々同音より出でしものなるべきこと疑無し、
k g の類も、拗音又合口音のときは y に通ふ例あり。

冀 (k)

異 (y)

喟 (ku)

胃 (yu)

嬌 (kieu)

爲 (yui)

僞 (ogui)

貴 (kui)

遣 (yui)

置 (gi)

獲 (kuak)

簍 (yuak)

愆 (ken)

衍 (yen)

禁 (kim)

類 (yim)

此中後世の音にては、ngy の ng を落として y のみと爲ること最も多し。韻會に尤は疑求切とあり、これ元時代の音なり。官話にても疑は g 又 ng なり。蘇州音にては本音 ng の g を落として u となる。北音にて牛莊の Ngiu tsang を Niu chang と言ふが如し。

舌音 t d の類と齒音 ts ds s z j の類との轉換は、支那音に於いて屢々

見受くる所なり。今此兩類と喉音 y との關係を探るべし。

他 (t'a)

馳池 (di) 地 (di)

也 (ya) 醜 (yi)

弛施 (zi)

古は它も也も同字なりしといへば駝 (da) 蛇 (da) も此類に入るべし。

似 (zi)

以 (yi)

剔 (tek)

易 (yi, yek)

鐸 (dak) 澤 (dak) 宰 釋 (yek)

釋 (sek)

賜 (si)

隕 (duai)

遺 (yu)

酒 (tsiu)

酉 (yu)

世 (sei) 繼 (set) 泄 (yei) 拙 (yet)

抽袖 (fiu)

琮 (to)

宙胃 (diu)

由油 (yu)

途 (do) 除 (do) 余 (yo)

岫袖 (ziu)

徐 (zo) 蜍 (zo)

繩 (dzong)

蠅 (yong)

通桶 (t'ong)

誦 (zong)

甬湧 (yong)

仍 (jong)

孕 (yong)

豕緣 (t'uen)

緣蜎 (yuen)

誕 (dan)

延 (yen)

椽篆 (q'uen)

涎 (zen) 鉞 (zen)

船 (q'uen)

沿 (yuen)

莢稔 (t'am)

牒 (dep) 牒蝶 (dep)

談淡 (dam)

炎 (yem) 琰 (yem)

揲 (dzet)

殢 (yep) 葉 (yep)

剡 (zen)

漈 (set)

律 (lui)

聿 (yui)

唐宋時代の音韻の類別は、其時代音を根據と爲したることなれば其變化の原因の説明に至りては、之を他に求めざるを得ず。顧ふに此の如き變化は、遠き昔に起り之に時代時代の感化を加へて、其結果の傳はり來

りたるものなるべし。左に聊か其説明を試むべし。

舌音齒音の喉音と轉換するは、口腔の中部に於いて、舌身の上がりて、其位置を移動するに由りて、生じたる變化なるべし。此位置は發音に緩みを生じて、豊富なる轉音發生の源と爲る拗音の位置なり。是を韻鏡に徴するに、此等の拗音は、a の韻又響の強き o の韻、即ち一等韻に伴ふこと至つて稀なり。上古の音にも、同様の傾向ありしや否や、知ることを得ざれど、也を聲符とせる他、畢を聲符とせる鐸、余を聲符とせる途、甬を聲符とせる通、延を聲符とせる誕、炎を聲符とせる談の類は、一度は拗音の形にてあるべかりしに似たり。又此類に濁音文字の多きを見るも、歐洲語にて、j y の相通ふことを思ひ合はすべし。其の清音なる者は、濁音より轉じたる者と看做すべき場合多きが如し。斜の字の如きは、一旦抒の義にて邪の音と爲り、谷の義のとき又耶の音と爲るは、聲符余の示すが如

き、古音に戻りたるものか、或は昔より其儘古音を傳へたるものならん。前に出だしたる例の如く、拗音にては、牙音 *k g* の類の、喉音の *y* に通ふことあるも、其説明は舌音齒音の場合に同じ。

舌音齒音の轉換は、拗音のみに限るべきに非ざれど、双方拗音ならざるときも、一方に拗音の者多く又濁音の者多きは、殊に注意すべき事なりとす。前に擧げたる *t* *h* の類の *y* に通ふ例にて、舌齒兩音の關係は、既に明かなるべければ、參考として尙左の諸例を加ふ。

致 (tɕi)	至 (tsi)	礎 (tɕim)	甚 (tɕim)
題 (dei)	是 (zi)	覘 (t'em)	占 (tsen)
重 (dɔŋ)	鍾 (tsɔŋ)	咄 (tuot)	出 (tsut 又 tsut)
孃 (ɲaŋ)	襄 (ɲaŋ)	貂 (ten)	召 (seu)
傳 (dwen)	專 (tsuen)	儻 (din)	壽 (zin)

今の官話にては舌音^ㄒと齒音^ㄑとの區別無く共に^ㄣを以て之を表はす。

次の二例は^ㄒと^ㄣと通ひたる者を示す。

據 (t'o)	慮 (o)	獺 (t'at)	賴 (lai)
---------	-------	----------	---------

牙音喉音の、往々舌音齒音に通ふことあるも、多く前類同様の拗音に於ていは行はれたるものゝ如し。

枳 (t'ɿ)	只 (t'ɿ)	午 (ng'o)	杵 (t'ɿ'o)
詣 (ngei)	旨 (t'ɿ)	糗 (k'in)	臭 (t'ɿ'u)
技 (t'ɿ)	支 (t'ɿ)	殷 (k'eng)	聲 (seng)
祇 (t'ɿ)	氏 (t'ɿ)	薊 (kuēi)	歲 (suei)
獠 (ngei)	示 (d'zi)	夾 (k'ap)	浹 (tsep)
覓 (ngei)	兒 (t'ɿ)	及 (t'ip)	扱 (t'ɿ'ap)

慧 (vei)

慧 (zei)

希 (hi)

絺 (ti)

哈 (hai)

台 (tai)

訓 (hün)

川 (ts'uen)

右は廣き範圍に於いて、行はれたる者とも思はれざれど、此の如き轉音ありしは事實なるべし。是は歐洲語の ch 又 g に硬軟の聲あるに類似す。今の官話にては、ch の k に通ふこと常事なり。かゝる場合に於いては、k g の類を喉音と唱ふるより、從來の名稱にて牙音と唱ふる方適當なるべし。

轉音の法則は上記の如しと雖も、聲符の方にて、音を變へて韻符と爲りたる者も多ければ、聲符の音を以て、一概に古音なりと斷ずべからず。例へば阿を可、冀を異他を也、笛を由、談を炎、傳を專、詣を旨、穢を歲と呼ふべからざるが如し。阿冀他笛談傳詣穢に對して、可異也由炎專旨歲は韻符となりたるなり。

以上は支那音の變化につき、發音の法則を基として、聊か愚見を述べたるに過ぎずして、其法則に例外あるも亦承認する所なり。かゝる變化は寧ろ狭き範圍に於いて行はれたる者多く、決して自由自在の運用なりしと考ふべからず。語學者は、小數の實例を捉へ得て一般の法則と誤解し、之を以て直ちに萬事を説明せんと試み、危險にして怪しむべく且つ笑ふべき結果に陥ることあるは、住々見る所なれば、速斷の見解は深く慎しまざる可からず。

發音の轉化は自然の法則に基する所の事實なれば、同字に異音ありたればとて、之を以て強ちに轉音なりとは斷じ難し。樂は音樂の義なれば ngak, 娛樂の義なれば, lak なれど、義と韻の通へるのみにて ng と l とは縁遠き音なり。稟は稟賜の義なれば *ing*, 稟受の義なれば *pin* なり。自他反對の意にて義通ひ又同韻なれど、l と p とは聯絡ありとも覺えず。射

は騎射の義なれば *qsa* 僕射の義なれば *ys* 女は男女の義なれば *no* 汝の義なれば *zu* にして、夫々同韻轉音の語なれど、義の通はざるを見れば、一を以て他の假借と爲したるに過ぎず。畜は家畜の義なれば *ju* 又 *jeu* 養の義又六畜の義なれば *ju* 又 *jeu* にして、音義相通へる眞の轉音轉義の語なり。上の四例は皆同字を以て同韻異音の兩語に當てたるを示す。同韻異音の兩語に兩字を當て、而して一方の音を以て他に移せば、取りも直さず疊韻反切法と爲る。其一字音韻共に他と同じからずして、一の音を以て他の韻に移せば、普通の反切法と爲る。意ふに反切法の起因は、此の如き者なるべし。

疊韻反切法は、之を諧聲字に移せば、本字と聲符との關係と爲るべし。本字と聲符と音同じからざるときは、多數は本字と音の相轉換する者を、聲符として擇める者の如し。又聲符には音符の如く見ゆる者にして、其

實は韻符として取扱ふべき者あり。假借用法にて、韻注を用ゐるが如く、同韻の字を以て、別音の字の聲符と爲すとき、聲符自身も其本字の音に化せられたるが如き觀を生じ、同聲符を以て、他の本字と同音同韻の字の音を表はすことあり、而して聲符の音を轉じて韻符と爲るとき本字と義の通へる者多し。これ會意諧聲の兼用なりとす。

谷 溪の義なれば穀と同音なり。谷風を穀風と注するを見て之を知るべし。然るに欲の聲符は谷なり。案ずるに谷は容の字形中に入り、其音を受けて欲の音符と爲りたるものなるべし。浴は又之に従ひ、俗は其轉音なるべきこと疑なし。裕も同系に屬する字なり。

洩 本來夷の音なり。涕と同義にて、其音に移りたる者の如し。一度弟の音に變ずるときは、夷は同音萑鯁缺の音符と爲る。

路 說文足に従ひ各に従ふ。道路の人各適く所あるを言ふなりと、各

亦聲なり。路を客の假借に用ゐたる例あるを見れば、各は韻符なるべきこと疑無し。路に従ひて各は賂輅洛酪絡駱の音符と爲れど、其實は韻符なり。

覽 說文見に従ふ監の聲なり。監は亦下を見るといふ義あり。監督の監の音より、義の通へる覽に入りて韻符と爲り、藍檻濫檻之に従ふ訟頌 此兩字說文何れも公の聲なり。言頁は義を表はせど、公にも亦義あるを察すべし。松公の音之に従ふ。公は韻符なりと知るべし。

甚 說文甘に従ひ匹に従ふ。甘亦聲なるべし。斟蹠覲諶湛は甚の音に従へど、堪勘戡には甘の音再び現はる。甘は甚に入りては韻符なりと知るべし。

鍼 說文金に従ふ咸の聲なり。又針に作る同音なり。案ずるに鍼と緘と義相通ひて、咸は鍼の韻符と爲りたるに非ざるか。箴箴之に従ふ。

鍼は又牙音に響くことあり。

駁 説文馬に従ふ爻の聲なり、馬の毛色の爻錯するを言ふなり、故に亦義を示す、これ韻符なり。轉じて駁論の駁と爲る。駁は馬の名にして其音駁に同じ。𪔐の音は是より出づ、𪔐は砲に作る。

𪔐 説文目に従ひ少に従ふ、一目少なる義なり。此少亦聲を表はすこと疑なし、即ち韻符となりて秒妙之に従ふ。

灑 説文水に従ふ麗の聲なり。麗亦義を示して韻符と爲る、麗纏麗灑灑之に従ふ。

右は見當り易き例を挙げたるに過ぎざれば、是より推して宜しく他を察すべし。此類にて義の通はざる者は、只韻を示すに過ぎざるのみ。

一の字の、他の字に入りて、音を隠して其韻符と爲るが如きは、敢て怪しとするに足らず。説文に某の省聲とある者に至りては、聲符の形をすら

見出すこと能はざることあり。汨羅の汨は水に従ふ冥の省聲にして、鑿戰の鑿は鑿に同じく、金に従ふ塵の省聲なれど、此等は容易に其聲符を認め難し。恬淡の恬は甜の省聲、豪宕の宕は碭の省聲なりと云ふに至りては、直接に音韻を探るべき由なし。上例恬宕の兩字は、省聲といふよりは、寧ろ下の如く説明すること適當なるべし。普通の場合に於いては、甘易は韻符と爲りて、怊寡の新字を作るべきを、其聲を聲符より義符に移して恬宕と爲し、恰も舌に甜の音、石に碭の音あるが如き觀を呈せしめしなり。縦ひ聲符の形ありと雖も、惠の穗に入り、去の法（**說文**には會意とあれど、去は聲なるべし）に入るが如きは、古韻又**說文**の知識あるに非ざれば解し得られざるべし。

轉音の法則及び諧聲字音符の別の大要は、以上に述べたるが如し。之を記憶に留め置きて、文字作製當時の上古の音を探り、其變遷を原ねんと

試むる例數題を舉ぐべし。

兌 古音說なり、喜悅の義なり。假りに之を舌韻 *yua* (去聲 *yua*, 入聲 *yua*) の音と爲すべし。 *yua* は *yuai*, *yuei* と爲り、*yua* は *yuat*, *yuet* と爲る同音の言の異義に用ゐらるゝより其別を立つるが爲め、本音本義の字には言又心の扁を添へて說悅に作る。兌は利鋒の義と爲るときは、*yuai* より *yuei* に移りて銳に作る、これ假借なり。本義轉じて口を開く形より、發音の意にて遊說論說の義となれば、音又轉じて *suai*, *suei*, *suat*, *suet* と爲る。租税の税に假借するときも、同じく *suai*, *suei* なり。我國にて說税を濁音に呼ぶこといかが。其間に義又轉じて、行道兌たりの兌と爲り、音も亦共に轉じて *juai* 又 *duai* の拗音より、更に *duai* の直音と爲りたる者なるべし。兌換の兌は *duai* の *dua* と促まり、脫走の脫は *dua*, *duat* と響く入聲となる。既に兌の音に此の如き變化あ

るを見れば、兌の聲符のみに由りては、容易に古音を判定し難し。説文に、兌は仝の聲とあり。此解正しからざるに似たれど、仝の古音は *Yuan* なるべければ、是亦兌の *Yua* なるべきを察する便と爲るべし。

台 古音古義共に怡なり。同音の言にして異義多きを以て、後之を怡に作りたるなり。其音は假りに喉韻にて、*と*と*ㄘ*の中間なる*ㄘ*と爲すべし。台は予の義即ち我の義に用ゐられたることあり、兩音相近かりしを知るべし。同音異義の言には、轉義又假借として、夫々詒怠貽貽飴の如く、台を音符とせる諧聲字を作る。怡の本義詒怠に轉じ、後又音も聊か轉じて、*ㄘ*又*ㄘ*と爲りたるが如し。此音は今の治の古音なり。*ㄘ*は*ㄘ*と爲り、*ㄘ*にも移り、後世に至りて*ㄘ*又*ㄘ*に變はりたる者多し。今音の詒怠貽飴苔給殆胎台等是なり。*ㄘ* *ㄘ* は西晋以後の音なり。漢魏の頃には尙然らざりしが如し。台は臺に假借す。

後漢書に我大和を耶馬臺の文字にて寫したるは作者の南音に非ずして、其當時の音なりしなるべし。因りて台のさにに近き音なりしを知るべし。治にさの音あるは、台の古音を傳ふる者なり。古韻の用法に由れば、此字の本音はとと爲る。台は説文に口に従ふ日の聲とあり、日は已なり。我古書に已をヨの假名に用ゐたること徴と爲すべし。台は聲符となりては古音を示す者多し。

它也。清朝の學者多く兩字を以て別言の標記と爲す。漢字詳解は兩字同言にして、古は它の字のみなりしを、音一轉し、漢の時代に也の字を製作して、它と之を分ちしなりと説く。此說從ふべし。它はもと虫の象形字なり、後虫扁を附して蛇に作る。此音舌韻ㄅ又ㄆなりしが如し。佗陀駝沱の類は皆假借なり。它是さの音に轉じ、也を以て之に當つ。它と也とは象形字類似する所ありたればなり。酈區地等の

音之に従ふ也。と它とは忽ち新舊混同して、佗を他に、駝を馳に沱を池に作るに至れり。されど駝と馳、沱と池の如きは現時の用法又其音義を異にす。地枕弛施は皆也を聲符とせる者なり。它を聲符とせる者は、多く拗音^{wa}より、直音^{wa}又^{wa}に移り、也を聲符とせる者は、多く^{ye, de, te, se}等より、更に^{yi, di, ti, si}等に變はれり。今日より見れば、詩の委蛇委蛇の蛇は^{sa}と讀むべきか、^{sa}と讀むべきか、判じ難きに至りたれど、古音は^{(sa)(ia)}或は其轉音^{sa}なるべきこと疑無し。さすれば能く韻律に叶ふ。它の類の字と也の類の字とは先秦時代の古韻の用法を見るに全く同律なり。以て它也の兩字は、同音の標記なりと言へる説を確かむるに足るべし。

多 古音^{wa}に非ずして^{wa}なるべし。參は此音なり。參は説文に大に従ひ、多に従ふ會意なりとあれど、多は亦聲なるべきこと疑なし。參は

開張の義盛大の義にて、侈と義相通じて、奢の義と爲る。侈は人に從ふ多の聲とあり、參と侈と同音なりしを知るべし。參は侈と共に侈の音とも爲る。侈侈侈侈等も同音なりしも、後侈より更に今音の^ㄅに移る。侈は説文に禾の從ふ多の聲とありて、禾の倚移する義なりと云ふ。多の音^ㄊの轉じて^ㄅと變はり、侈の韻符と爲りたるなり。侈は日本紀に、彌移居の如くヤの音に用ゐらる、以て其證と爲すべし。此音後に^ㄣと爲り、更に^ㄅと爲れり。多の聲符に由りて、侈の古音は多なりなどと斷ずべからず。

煖 説文火に從ふ爰の聲なり。爰は今音にては^{ㄩㄢ}なれど、古音にては^{ㄩㄢ}又^{ㄩㄢ}なるべし。煖は之と其聲の通へる、此字を韻符とせる^{ㄩㄢ}又^{ㄩㄢ}の音なり。煖は喧又煊に作ることあり、宣の今音は^{ㄕㄨㄢ}なれど、古音は^{ㄕㄨㄢ}なるべく、而して此字を韻符として、喧煊も^{ㄕㄨㄢ}

又 huan と爲るに由りてなり。煖の古音は爰、煊の古音は宣なりと斷ずる者は、煖煊の同音なるを如何に説明し得べきか、其解に苦しむ所なるべし。緩は煖と同音なり、又煊の字あり、緩かに溫むる義にて煖と通じ、遂に煊の音煖に移り、煖は nuan に轉じたるなりと。是は巧妙なる説明なれど、緩煊の二字を借らずとも、直ちに轉音として解釋することを得べし。始に溫の義に nuan の音ありて、之に煖を當て、後更に nuan の音に轉じて、同義に兩音生じたれど、尙同字を用ゐ、煖は huan 又 huan と nuan 又 nuan との兩音を兼ねるに至りたるなるべし。この nuan は漢音にては duan なり。

石 古音喉韻入聲 zo (zō, zok) なるべし。此音後世 zak zek と爲り、我漢音にては sek 官話にては shih に轉ず。去聲拓に入りては tsak, tsok, 入聲拓拓に入りては tsak, tsok と爲る。此等の字の古音は、符號を附

すれば、去聲は *tsok* 入聲は *tsok* なるべし、庶の *tsok* 遮の *tsok* 撫の *tsok* *tsok* と變化するを見て之を悟るべし、拓と撫とは同音なり、拓は又 *tsok* の音あり、此古音も入聲 *tsok* なるべし。度は古音去入兩聲 *tsok* (*do, do*) なるに、今音には *to, da* の兩音あるが如し。石は妬に入りては *ts* の音なり。是は *ts* の轉音なるべし。石の古音を *ts* と假定せしが、其實は *no, to, to* 何れの音なりしか判じ難し。説文に宕を傷の省聲と言ふは、正當なる解釋に非ざるが如し。宕は石を聲符と爲し、之に尾音の添はりたる、去聲と見ること可なるべし。宕の古音は *dang* に非ずして、*dang* 又 *song* なりしかと推せらる。石の聲符に依りて、宕の古音は石なりなどと斷ずべからず。

而 説文象形須に同じ、即ち頤下の毛なり。案ずるに須は亦聲なるべし。而は汝爾に假借す、其聲相近ければなり。而の一音を喉韻の *no* と

假定す。而を聲符とせる字に需あり。需は説文に雨に遇ひて進まず、止まり。頤つ義なりとあり。頤も須と共に聲を示して、而需同音なりしと知るべし。需は柔又弱に假借するを見れば、其音相通ひたるものゝ如し。此無尾韻を有尾韻に延ぶれば、jongとなるべき格なれど、稍韻を締め、喉韻を舌韻に移して、janに變じ、更に nan に轉じ、又後世 jen とも爲れり。韻書の反切より推して考ふるときは、皆合口音なりしかと思はるゝ所あり。因りて之を jan, nuan, jen と記すべし。又需に心の扁を附して、義を明かにし、之を儒に作る。nuan は我音にては nan 又は dan と爲る。儒夫の儒は、其尾音のロを取りたる音なり。又霽の字あり、説文に稍前大なり、大に従ふ而の聲とあり。弱の義のときは、輓又は便に作る。軟は之に對する俗字なり。霽の古音は jan 又は nan、或は其合口音 juan 又 nuan にして、需と同音なり。儒を輓に、儒を

𦵏に、濡を𦵏に、濡を𦵏に作るも、此故なり。𦵏も需と同じく後世にては *jeu* と爲れり。而に又喉韻 *ɔ* の音ありて、𦵏も亦之に従ふ。𦵏は地名にて𦵏に作り、𦵏は爛の義にて𦵏に作ることもあり。又而の需に通ふより、𦵏は𦵏に、𦵏は𦵏に作ることもあり。後世の音にて、𦵏の衆の義のとき *no* と爲り、𦵏の臂節の義のとき *nan* と爲るは轉音なり。而に尾音を附すれば、*jong(joing)* の聲と爲ること自然なり。𦵏々の牆を築く聲なるは即ち是なり。𦵏は足疾の義のときは𦵏と同音なり。其の嫩と爲るは、𦵏の義に通ふ轉音なり。𦵏の本義は醢にして、其本音は而（如之切）なり。而は耐に通ひて同音同義と爲る。耐の古音は *no*。又 *no* の類なりしが如し。能も其古音は同音なり。故に耐而は能に假借し、能の音延びて *nong(noing)* と爲るとき、耐而も之と同音と爲る。耐能を *nai, tai, dai* と呼ぶは、後世の音なり。

右の如く轉音轉韻の多き字は、聲符のみに由りて、容易に本字の古音を斷じ難し。

𪔐 端と同音同義なり。而の聲に従ふが如く見ゆれど、象形其基を異にして、上は生形に象り、下は根に象ると云ふ物の首の義にして其音は *tsan* なり。湍湍同音なり。その屢々拗音に通ふを見れば、古音或は *tsan* なりしなるべし。湍𪔐は𪔐の聲に従ふ字なるが、今音にて湍は *tsuen*、𪔐は *tsuen* なるより、其の拗音なりしを察すべし。𪔐は説文心に従ふ𪔐の聲なり。此字の今音は *tsu* なれど、古音は *tsuan* 又 *tsuan* なるべし。此類の韻の字の *a o i* と變はり、又播の *pan* より *pa* に移るが如く、尾音を落として、*an* の *a* と爲る例を考へ合はすときは、此の如き變化は別に不審とするに足らず。同様に湍も手に従ふ𪔐の聲にして、古音は *tsan* の類なるべかりしに、今音は *tsu* なり。湍は説文

に玉に従ふ揣の省聲とあるは心得難し。直ちに之を耑の聲と爲して、差支あることなし。此字の今音は^{ㄒㄩㄣˊ}なれど、他の例と同じく、古音の有尾韻なるべかりしこと疑無し。揣穢の今音にも^{tuān, tuā}の兩音あり、而してこの^{ㄒㄩㄣˊ}は^{huān}の^ㄏを切りたる者と見做すことを得べし。上例の諸字の聲符耑は、古音を示すに非ざれば、少くとも古韻を示す者と言ふべし。

盍 說文覆なり、皿に従ふ大の聲なり。此字俗に盒に作る。爾雅に音義の注を附して、盍は合なりと云ふ。盍は義を轉じ音を兼ねて、左傳に何不と爲す。故に其古音を脣韻入聲^{ㄍㄜˋ}と假定することを得べし。又爾雅に盍を曷と爲す、兩字脣韻舌韻の差にて、音相近ければなり。臘に藹を借り、鑑に鑄を借るは、此類の轉聲にて、葛を韻符として、舌韻を脣韻に移したるなり。盍は大の聲なりと云ふに至りては、疑

義を生じ、大は聲に非ずして形を示し、皿を覆ふ義と爲す者あり。されど細かに考査するときは、大に聲ありしかと思はるゝ所あり。蓋は説文に艸に従ひ、益に従ふ。此字の音の ト は、大の聲に従ふものゝ如し。蓋は此去聲の外に亦益と同じき入聲あり。揚雄が羽獵賦に蓋を音符とせる盭を、轉岷外と押したる例あり。これ去聲入聲無差別にて、舌韻臂韻相通ひたる例なり。されば大はかゝる用法に山りて益に入り、義と聲とを兼ねる者と見ること可なるべし。益を盭に作ること如何。去の本字は厶にして、説文大に従ふムの聲なり。厶は藏の義にて、益と形義相通ひ、遂に太を厶に作り、益の音を厶即ち去に移し、益を盭に作りたるものゝ如し。去の劫怯又法𠂔に入りて、其聲と爲るは之に従ふものにして、去の本音を聲符とせるに非ず。盭は𩺰に入りては yap と爲り、又入聲より去聲に移り、𩺰に入りては

yam に轉ぜり。これ飴豔の古音なるべしと推定す。

龍 說文に、肉に従ふ、豈は肉飛之形、童の省聲とあり。されば童は龍の韻符と爲りたるなり。此字通の義、龍の義と爲り、又黑白雜色の義にて、厖の音に通ふときは、其音何れも假借なるべし。其中通龍は龍の轉音と見做すも可なり。龍は龍龐弊に入りては、韻符なるべきこと疑無し。龍は飛龍の形にて、沓と同音なり。說文響は言に従ひ、襲は衣に従ひて、共に龍の省聲なり。今音の *dap*, *tsep*, *zip* は古音 *dap*, *tsep*, *zap* の類にして、相轉じたるものなるべし。響襲の龍は、直接の聲符と誤認すべからず。

以上の十題は、多少古韻の知識を要すべしと雖も、音符韻符の別に加へて、拗音轉化の例を示すに十分なるべしと信ず。支那近世の學者に、古音に拗音無しと説ける者あれど、其は發音の法則を解せざる、無稽の妄見

と謂ふべし。

精細なる古韻の變遷の説明は支那古韻史に譲る。

追加

其一 喉音と牙音

北京大學出版の錢玄同氏著文字學音篇に、從來の喉音所屬の字母と定められたる影曉匣喻と、牙音所屬の字母と定められたる見溪群疑との配置を改め、影喻を深喉音曉匣と見溪群疑とを合はせて淺喉音に作る。羅馬字を以て之を寫すに、影は母音のみにして、其頭音 (Consonant) に當る字母に擬すべき者無し。反切にては於希切依、衣嫁切亞の於衣の如く母音の字を切字として用ゐることあるに由り、其母音の字を、字母として取り扱ひ居れど、頭音の缺如せるが故、**韻鏡新解**にては、其位置に○を附して、之を補ふことゝせり。其の合口音と爲るときは、○を省き、其場所に u 又 w を置いて、合口音の標目と爲す。是は素より字母に非ず。理論上よ

り言へば、この u 又 w は、只○の下に來る所の、母音の前に添へ置くべきものにして、○の位置に表はし置くべきものに非ず。影母の合口音に對して、u よりも常に w を選み用ゐるは、其響稍強くして、頭音の如くきこゆる所あるに由りてなり。曉母は現代支那音に照らし合はせて、h を以て之に擬す。匣母は濁として音韻表に載せらるゝこと常なれど、喉音の濁は、他と其性質を異にする所なり。今影母に出氣の符號を附し、o と爲して之を表はす。其合口音は、u 又 w に作る。即ち○の省かれて其右肩の符號の、u 又 w の、左肩に移されたるなり。喻母には y を當つ。見溪群疑の四母は k k' g ng にて表はす。

曉匣を淺喉音に作ること疑問なり。此兩母の性質は、深喉音に屬するが如し。曉母は口腔の後部に觸れて發する音なり。我國の古音に曉母の如き h 音無かりしに由り、之を寫すに加行の k 音を以てせり。されど此 h

音はk音よりは、其響強かりしなり。今音のh音は、唇音より移り來れる者なり。匣母は影母との關係の密接なるよりして、其の深喉音なるを察し得べし。匣母を喉音中の濁に作れるもこれがためなるべし。匣母の音は、我方にては適當に寫し得ざるに由り、之に對して濁加行のg音又和行のw音を用ゐるを常とせり。喻母を深喉音に作ること、喉音の全體より見れば、妨無きに似たれど、寧ろ之を淺喉音の中に入れ置くこと、適當なるが如し。近代音にては、影喻往來は繁頻となりたれど、古音にては影曉匣の開口音のときは、喻に通ふこと少く、合口音のときは多きことは、喻母の他の三母と異なる性質あるを示し、又既に記したるが如く、其の舌齒の音と通ふ所あるを見ても、其發音の位置の、口腔の中部に近づき居れるを示すものゝ如し。

見溪群疑は既に證明したるが如く、影曉匣と自由に相通ふ所あるを見

れば、其の深喉音に屬すべきこと疑無し然るに此等の四母を代表する
k g の類は稍其響を變へて、口腔の中部にても發音し得べきに山り、拗
音又合口音の時は、喻母の y に通ひ、或は又直拗開合を問はず、其儘直ち
に舌音齒音に通ふことあるを見る。かゝる場合には、舌音齒音の方には、
拗音又合口音の多きを見るを常とすかくの如き變化あるに基きて、牙
音の名稱は出で來りたるものなるべし。此牙音を淺喉音と唱ふること、
異議あることなし。然りとするときは、見溪群疑は深喉音淺喉音の雜り
音と爲る。先人の字音に關する觀念は、精確ならざりしに山り、廣く牙音
の名を設けて、兩類の音を其下に抱括せしめたるなり。

其發音の位置の細密なる穿鑿に立ち入らずして、影曉匣喻の方を深喉
音見溪群疑の方を淺喉音として分ち置くこと、便宜上の分類として、大
體の上に於いて、承認し易かるべし。或は從來の喉音の名稱を其儘存じ

置き牙音の名稱を腭音に改むることいかん。

其二 牙音喉音と半舌音

牙喉の兩音と、半舌音と、同聲符を有する諧聲字多し。左に其例を列舉す。

牙音喉音

半舌音

牙音喉音

半舌音

聲符兼 (k_{em})

聲符僉 (k_{em})

縑縑 (k_{em})

廉簾鎌 (l_{em}) 瀛

鹼 (k_{am}) 檢檢驗 臉驗 (l_{am}) 匱歛

謙謙 (k_{em})

縑 (l_{em})

劍 (k_{em})

(l_{em})

嫌 (em)

儉儉 (g_{em})

聲符監 (k_{am})

嶮嶮驗 (ng_{em})

鑑 (k_{am})

藍檻濫覽纜 (l_{am}) 險儉 (l_{em})

檻艦 (am)

聲符立 (l_{ip})

聲符麥 (l_u)

泣 (k_{ip})

拉 (l_{ap}) 粒笠 (l_{ip})

膠 (kəu)

膠 (lau)

聲符各 (kək)

膠繆 (kiu')

繆 (iu) 繆 (iu)

閣 (kak), 格 (kək)

洛落絡烙酪

戮 (iuk)

恪 (kək) 客 (kək)

(lak) 略 (lak)

聲符可 (kək)

額 (ngək)

柯軻歌哿 (kə)

哿 (lə)

恪 (ək)

聲符果 (kua)

珂軻 (kək)

課 (kua)

裸 (lua)

訶呵 (hə)

嫫 (wə)

何荷河苛 (ə)

夥 (wə)

聲符庀 (kə)

虎 (kə), 據 (kə)

盧鱸輻鱸蘆盧

聲符婁 (lu)

墟 (kək)

(lo), 盧 廬 慮 (lo)

屨 (ku)

樓 (lou) 樓 屨 屨

遽 (gə)

遽 (gu)

(lu)

虛獻 (kō)

聲符呂 (ō)

莠筍 (kō)

侶 (ō)

以上の諸例を見るに頭音の k g h の類と、l と密接なる關係あるが如し。

樂 其義に従ひて ngāu, ngāk, 又 lak の音あり。

谷 史記匈奴傳に國王の谷蠡を鹿離に作る。

角 前漢四皓の一人なる角里先生を祿里先生と呼び、此外尙角の古音を祿と爲す例あり。

右の諸例の中には、其本義の轉ずると同時に、其頭音の移りたる者もあるべし。或は又只聲符のみを同じうしたる者もあるべし。牙音又喉音と半舌音とは、口腔内の位置より考ふれば、發音の轉換を許さざるが如く思はるれど、偶然暗合の事實としては、其例多きに過ぐるなり。本篇に於。

いて既に牙音喉音の舌音に通ふ例を擧げたり。半舌音も亦之に準ずべきものと見做すべきものか。k g h の類と l との轉換は、支那音特殊の變化に源由するものなるか、姑く記して識者の教を待つことゝす。

昭和五年八月十日印刷
昭和五年八月十五日發行

所	權	著
有		作
(考韻音字漢)		

賣捌所

東京市神田區今川小路二
電話九段(33)〇九一八番

松雲堂書店

振替東京五〇七〇九番

定價金八十錢

著作兼
發行

東京府荏原郡荏原町戶越二八二
大島正健

印刷者

東京市芝區金杉新濱町十二番地
和田助一

印刷所

東京市芝區金杉新濱町十二番地
單式印刷株式會社

交 學 博 士
大 島 正 健 先 生 著

韻 鏡 新 解

定價金貳圓貳拾錢

右は古來難解と爲せる韻鏡の音韻に羅馬字を附し之を現代的に改めて説明し且つ其の唐代音韻の法則を精査し之に對して獨創の意見を以て解釋を施したる書なり

再 版
改 訂 韻 鏡

改正定價金壹圓

右は本邦韻鏡の原本なる亨録本に寫せる張麟之の指微韻鏡には唐代音韻の法則に叶はざる宋音の混入と誤寫の痕迹あるとを以て専ら唐韻廣韻と鄭樵の七音略韻鑑とを參照して訂正を施し其原書の復舊を試みたる書なり大震災の後僅に残存せる前版の備本を校正して寫眞版にて複製す

再 版
韻 鏡 と 唐 韻 廣 韻

定價金壹圓貳拾錢

右は韻鏡の唐韻廣韻の何れに據りたるか其疑問を解決し且つ韻鏡と唐韻喉韻との異同を説明したる書なり

賣 捌 所
松 雲 堂 書 店

東京 神田
今川 小路 二

振替 東京 五〇七〇九番
電話 九段 (33) 一八八番

文學博士

大島正健先生著

支那古韻史

菊判九百五十餘頁

定價金 八 圓

右は前編古韻の變遷後編古韻の發聲を合して一冊と爲す。前編は先秦時代の古韻を分類し降つて漢魏六朝を経て隋唐の二百六韻に移り複雑錯綜せる諸韻轉化の跡を逐ひてその分別を判定し、後編は古事記書紀萬葉等の古書に見えたる漢字の假字音に徴して詩歌賦頌に見えたる古韻の用法を考查し且つこれに憑據して彼我國交通の時期を推察し、更にその時代音の變化を説明したもので一讀古韻史組成の概要を知ることが出来る。作詩家讀史家はもとより苟も漢字漢文を使用する人士必讀の名著である。

東京東區神田區
神保町一〇番
東替振

發行所 富山房